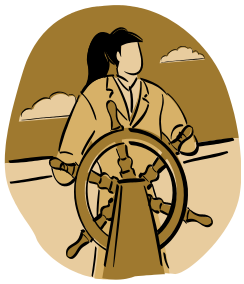
卓話モデル　１

ロータリーの職業奉仕
歴史と変遷



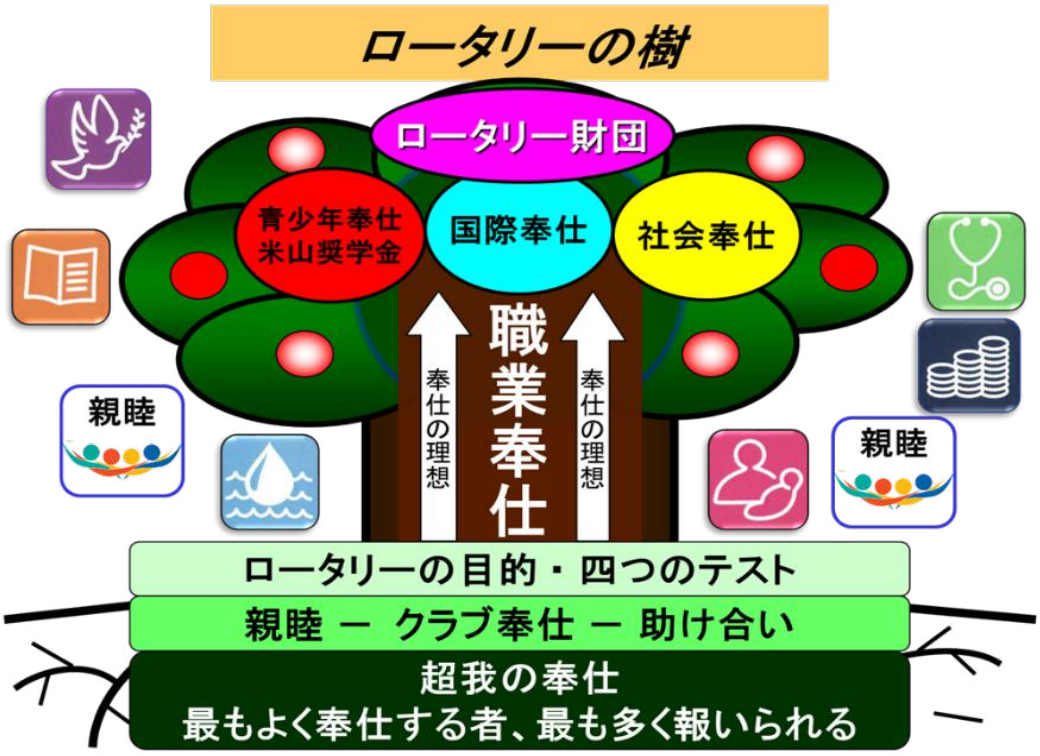
国際ロータリー第2660地区
2019-2020年度　職業奉仕委員会

1

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」というビスマルクの有名な言葉があります。私たちもロータリーについて、自分の経験した範囲だけにとどまらず、時間的、空間的に広い視野を持って考えてみる必要があるでしょう。

ここでは、職業奉仕を中心に、その歴史と変遷を振り返ることにより、現在及び将来のロータリーのあり方を議論する礎にしたいと思います。

＊＊
この卓話モデル１は、会員の皆様のご理解を深めるための資料として、職業奉仕についての歴史と変遷を概観するための必要な事項全体を取り上げました。
したがって、30分の卓話としては、かなりボリュームが大きく、全てをゆっくりと話しますと、40～50分を要するのではないかと思われます。
30分の卓話の際には、この中から、重要と思われるもの、興味のあるもの、ぜひ伝えたいものなどを抽出し、組み合わせていただきますようお願いいたします。
また、この解説文のほとんどを、末尾に示す文献から引用しています。ご了解いただきますとともに、この場をお借りして感謝申し上げます。
＊＊



＊『ロータリーの樹・２００８』を一部修正いたしております。 2

職業奉仕を考えるにあたり、ロータリーを表現する一つの樹から話を進めてまいります。

「ロータリーの樹」はロータリーの職業奉仕を理解する最も良い資料と思われます。これは、2008 年RI国際協議会の全体会議において、渡辺好政RI 理事が「ロータリーの樹・2008」と銘打ってロータリーを「一本の樹」に例えて、ロータリーの奉仕活動における職業奉仕の位置づけを行いながら、「ロータリーにおける職業奉仕の重要性について」の講演を行った時のものを一部修正し、シカゴにおいて開催された「2013年RI規定審議会の審議を経て採択されたもので、以下は渡辺好政氏の説明です。

2008年RI国際協議会
「ロータリーにおける職業奉仕の重要性について」講演　渡辺好政RI理事

「ロータリーの樹・２００８」　→ 2013年RI規定審議会で採択

「1905年、ポール・ハリスら４名によって創始された最初のロータリークラブは、その歴史が示すように、初めに、親睦、助け合いから始まりました。
すなわち、ロータリーの樹に水と栄養を送る「根」は「クラブ奉仕」であります。ロータリークラブ会員は、クラブという学校で相手のことに思いを馳せ、相手を助けるという『奉仕の理想』を学び、その真意が『共存共栄』であることがわかります。
『クラブ会員』は、ロータリーの目的を基本として、H.テーラーによって実証され、ロータリアンの行動規範である「四つのテスト」による奉仕活動の実際を体得することによって、『ロータリアン』に進化してまいります。
ロータリークラブ会員からロータリアンに進化してゆく過程の基盤には、A.シェルドンの『超我の奉仕』『最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる』が存在いたします。
私たちは、この２つのモットーを１枚のコインの表・裏と考えながら、日常の奉仕活動に邁進しております。ロータリーは「理念の高唱」に終わるのではなく「行動の哲学」なのであります。」

3

「1905年、ポール・ハリスら4名によって創始された最初のロータリークラブは、その歴史が示すように、初めに、親睦、助け合いから始まりました。すなわち、ロータリーの樹に水と栄養を送る「根」は「クラブ奉仕」であります。ロータリークラブ会員は、クラブという学校で相手のことに思いを馳せ、相手を助けるという『奉仕の理想』を学び、その真意が『共存共栄』であることがわかります。『クラブ会員』は、ロータリーの目的を基本として、H.テーラーによって実証され、ロータリアンの行動規範（倫理的行動を判断する尺度）である「四つのテスト」による奉仕活動の実際を体得することによって、『ロータリアン』に進化してまいります。ロータリークラブ会員からロータリアンに進化してゆく過程の基盤には、『超我の奉仕』とA.シェルドンの提唱した『最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる』が存在いたします。私たちは、この2つのモットーを1枚のコインの表・裏と考えながら、日常の奉仕活動に邁進しております。ロータリーは「理念の高唱」に終わるのではなく「行動の哲学」なのであります。

職業奉仕関連の歴史概観　　その１ ＜創立期＞

1905　**ポール・ハリス**　職業人の「親睦」を軸にスタートする（シカゴ）。

1906　**ドナルド・カーター**　「奉仕」の考え方を持ち込む。

「入りて学び、出でて奉仕せよ」（内なる人づくり、外なる人づくり）

シカゴロータリークラブ定款

第１条　本クラブ会員の事業上の利益の増大
第２条　通常社交クラブに付随する親睦およびその他の特に必要と思われる事項の推進
＋第３条　シカゴ市の最大の利益を推進し、シカゴ市民としての誇りと忠誠心を市民の間に広める

4

ここで話されているところを、ロータリーの歴史の中で見ていくことにしましょう。

ポールハリス

ロータリークラブは、1905年、米国イリノイ州シカゴの青年弁護士ポール・ハリスが「友情とビジネスを混ぜ合わせたら、友情もビジネスも増えるのではないか」というアイデアをもとにして、３人の友人と語り合って発足させたと言われています。

ポールは、同業者間の親睦の難しさを痛感していたので、競争相手とならない友人の輪を作り出そうと、会員を一業種一人に制限したのです。これがロータリーの職業分類制度の始まりです。

この職業分類制度によって、会員は、クラブに対しては自己の職業の代表者という責務を負うことになり、また、ロータリアン以外の人に対しては、日常の仕事を通してロータリー精神を普及する責務を負うことになりました。この二つの責務が職業奉仕の基礎となったのです。

ところで、ロータリー誕生当時の定款（シカゴクラブ、1905 年）は以下のようなものでした。

一人一業種制度の限定会員制クラブとして4 名で創立する。
第1条 本クラブ会員の事業上の利益の増大
第2条 通常社交クラブに付随する親睦およびその他の特に必要と思われる事項の推進

このように、創立時は「親睦」団体で“Back Scratching”（お互いの背中を掻きあう）の世界だったのですが、やがて奉仕も行うクラブに変わっていきました。

ドナルド・カーター

そのきっかけとなったのが、1906年でした。その年、入会を誘われたドナルド・カーターは、一業種一会員制は自分達だけのエゴイズムであり、他の同業者、一般地域社会の職業人達はどうなるのかと疑問を呈したのです。

そこで、定款を改正し、
第３条 シカゴ市の最大の利益を推進し、シカゴ市民としての誇りと忠誠心を市民の間に広める
を追加したのです。奉仕の理念「われらの親睦のエネルギーを世のため人のために」が導入されたことにより、ドナルド・カーターは喜んで参加したと言われています。「親睦」と「奉仕」が融合したクラブとなったのです。

現在のロータリーでもよく使われている「入りて学び、出でて奉仕せよ」という標語がこのスライドに示されていますが、「入りて学び」はロータリーがロータリアンの修練の場あること（親睦を通した内なる人づくり）、「出でて奉仕せよ」はロータリアンが外に働きかける人づくり（奉仕を通した外なる人づくり）のことで、人づくりはこれらが両輪となって行うものとの意味でしょう。

ちなみに、米山梅吉氏は、ロータリーは「人生の道場である、人づくりの修練の場」と言っています。

職業奉仕関連の歴史概観　その２ ＜奉仕の理想＞

1910　全米ロータリー大会（シカゴ）～1911（ポートランド）

アーサー・フレデリック・シェルドン
He profits most who serves his fellows best
→ 1921年、シェルドンが 「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」
（He profits most who serves best）に修正し、行動理念として提唱。
→ 2004年の規定審議会でHeをThey、2010年の規定審議会でTheyをOneに。

ベンジャミン・フランクリン・コリンズ
演説でコリンズが「無私の奉仕」（Service not Self）を引用
→ 後に、コリンズの「無私の奉仕」はいきすぎであるとし、
「超我の奉仕」（Service above Self）に修正される。

1912　「ロータリーの目的」（旧「ロータリーの綱領」）を制定する。

1915　サンフランシスコ大会　ロータリーの倫理訓（道徳律）が採択される。
第11条 マタイ伝からの引用　第6条 厳しすぎるサービスなどの批判から、1951年にはロータリーのあらゆる文書から消える。これに代わるものとして、1989年、ロータリアンの職業宣言（Declaration of Rotarians in Businesses and Professions）を採択した。（Ideal of Serviceの提唱）

5

アーサー・フレデリック・シェルドン

ロータリーの発足後しばらくして、ロータリーの目的や存在理由について疑問を持つ人が出始めたので、ロータリーの新しい理想を考え、それを明確にするために委員会が設置されました。そこで委員長に任命されたのが、アーサー・フレデリック・シェルドンです。

彼は、悪徳と信用不安が横行し、消費者は自分で自分を守るしかなかった当時にあっても、公明正大に経営している商店や会社が大成功している事実を知って、その理由を探求し、「職業は社会に奉仕する手段である」と他のロータリアンを納得させることができたのです。この考え方は、次第に他の都市に結成されたロータリークラブにも広がっていきました。

1910年に最初の全米ロータリー大会がシカゴで開かれ、全米ロータリー連合会が結成されました。大会委員長は、出席者に「私たちは、世界において進んで自己の任務を果たし、公徳心を高めたいと願い、職業において高度の道徳的水準を守りたいと思っています」と語りかけたということです。

そして、この大会の閉会時に、シェルドンは、職業倫理の重要性を強調し、腐敗や不正は排除しなければならないことを明らかにし、
「19世紀の商慣習の特徴は競争です。出し抜かれる前に出し抜け、ということです。20世紀に入り、人類は賢くなりました。20世紀の特徴は協調です。『人間は、英知の光に照らして、正しい行為は報われる。職業は人類の奉仕の科学である。最もよく仲間に奉仕する者、最も多く報いられる』（He profits most who serves his fellows best）ということがわかるようになりました」
と語りました。

この言葉は、1911年オレゴン州ポートランドの全米大会で報告され、のちに「He profits most who serves best」として、奉仕の対象をすべての人々とする表現に変え、ロータリーの標語の一つとなったのです。

2004年の規定審議会で「They profits most who serves best」に、また2010年の規定審議会で「One profits most who serves best」に変わりましたが、日本語訳「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」は変わっていません。

ベンジャミン・フランク・コリンズ

また、この大会の最終日にミネアポリスロータリークラブの会長、ベンジャミン・フランク・コリンズが、自分のクラブで採用し、厳守してきた原則は「Service not Self（無私の奉仕）」であり、これによってクラブを組織し、新しい会員にもこの精神を学ばせるのがよいと述べました。

この標語も参加者の賛成を得たのですが、のちに、人は皆自己を尊ばねばならないし、自己を守らなければならない、それならば自己を否定するnotよりも自己を第二に置くaboveの方がよいのではないかということで、「Service above Self（超我の奉仕）」に修正されました。

これらの二つの標語は、この大会ではいずれも非公式なものとして採用されており、公式の標語になったのは、1950年デトロイト国際大会においてです。

この二つの標語のうち、One profits most who serves best は職業奉仕の理念を表すも

のであり、Service above Self は米山梅吉公が訳された「サービス第一、自己第二」の心がけが事業成功の秘訣であることを示すとともに、社会奉仕、国際奉仕の人道的奉仕の理念であることを表していると考えられます。

どのような組織にもその目的あるいは目標が必要です。1906年に採択されたシカゴロータリークラブの最初の定款はすでに申し上げた通りです。

その後、カナダやイギリスにもロータリークラブが結成され、全米ロータリー連合会（のちの国際ロータリー）は1912年にミネソタ州ダルースで開催された大会で、「ロータリーの目的」（旧ロータリーの綱領）を定めました。これはその後、時代とともに変更が繰り返されて現在に至っており、その対象は、事業のみならず社会生活にわたっています。ぜひ確認してみてください。

ロータリーの倫理訓

ここで、1915年のサンフランシスコ大会で示されたロータリーの倫理訓について述べておきましょう。

アーサー・シェルドンらの努力によってロータリー活動の基本は自分の職業を通しての奉仕であるというロータリーの根本原理が定着しました。職業奉仕は、ロータリアン一人一人が例会に出席して他の会員との交流・親睦を通してモラルを高め、日常の生活では自分の職業に真剣に取り組み、社員はもとより仕入先や顧客など周囲の人達のモラルを向上させて、業界の手本となり、その業界のモラルを向上させていくことなのです。クラブの会員一人一人が、それそれぞれの業界を受け持って、職業奉仕の活動を続けていけば、やがては社会全体のモラルが高まっていくことになるのです。

「ロータリークラブの会員は、その一人一人が自分の職業とロータリーの理想とを結ぶ環である」というポール・ハリスの「ロータリーへの私の道」の中での言葉も、このことを物語っています。

この職業奉仕の基本理念は1915年のサンフランシスコ大会でロータリー倫理訓(道徳律)というかたちで表現されることとなりました。この倫理訓は、起草委員の要請に応えたロータリアンの数百にものぼる提案をもとにつくられた5,000語の草稿をもとに、推敲に推敲

を重ねて作成されたものといわれ、具体的で分かり易く、非常に優れた倫理基準と考えられます。

ただ、残念なことに、第11条の文章がマタイ伝から引用されたものであり、宗教色が強いという点が問題となって、政治と宗教は取り込まないとするロータリーの原則に反するだけではなく、逆にロータリー運動が宗教活動と混同され、無用の誤解を招く恐れがあるという批判が続出し、国際ロータリーにおける慎重な検討の結果、1951年にロータリーのあらゆる文書から姿を消すことになりました。国際ロータリー細則第16条に残っていた道徳律という語も1980年の改正で完全に削除されました。

宗教的問題だけでなく、その内容の厳しさも批判の対象となりました。特に、第6条の内容を厳密に解釈すれば、販売した商品については、永久にアフターサービスの責任を取らねばならず、現実の問題として実行不可能であるという批判が多くなされたのです。

ただ、宗教的な問題を除けば、この倫理訓がロータリーの高い理想を表現していることは間違いなく、「最近、問題となっている製造物責任法(PL法)は、この考え方に基づいた法律であり、これを1915年に発案したロータリーの職業奉仕理念の素晴らしさを改めて賞賛すると共に、この道徳律が、現在にも通用する優れた倫理基準であることを再確認すべきではないでしょうか」という田中毅氏の意見は重要な指摘であると思われます。

このようにして、ロータリー倫理訓（道徳律）は姿を消すことになったのですが、その内容は職業奉仕の根本原理を表すものとしてその復活を望む声も多く、1989年,RI理事会はロータリー倫理訓に代わるものとして、職業宣言を採択しました。その内容は、ロータリー倫理訓（道徳律）から、宗教的色彩とアフターサービスの記載を消去し、青少年や地域社会に対する技術提供と誇大広告の禁止を謳うことによって時代のニーズに適応したものです。

職業奉仕関連の歴史概観　その3 ＜決議第23-34＞

1922 ロサンゼルス大会　身体障害児救済事業に関する決議案を提出。
シェルドンを中心とする理念派とアレンを中心とする実践派の対立が分裂の危機へ。

1923 セントルイス大会　決議23-34（「綱領に基づく諸活動に関するロータリーの方針」） を採択。
1926年のデンバー国際大会で「社会奉仕に関するロータリーの方針」に名称変更がなされた（26-6）。その後も少しずつ改正を加えられ、現在にいたっている。

→ 決議23-34 第6条g項が、「論争に終止符」と言われている。

「ロータリアン個人にも、ロータリークラブにも、奉仕の理念に基づく実践が求められているが、**ロータリーの奉仕活動の実践は個人奉仕が原則であって、クラブが行う奉仕活動は会員の訓練のための例示である**ことが明記されたのです。」

(『ロータリーの心と実戦（2015年改訂版）より)

6

エドガー・アレン

ロータリー活動の基本は優秀な職業人であるロータリアンが毎週一回例会に出席してロータリーの哲学である奉仕の心を学び、それを通して親睦を深め、それによってさらに、奉仕の心を深め、充実させていくところにあります。例会出席によって形成された奉仕の心はロータリアン個人がそれぞれの家庭、地域社会、国際社会で実践に移すことになります。

1910年代に入って、このようなクラブとしての実践を伴わないロータリーの理念に飽き足らず、クラブとしての金銭的奉仕や身体的奉仕の実践をも積極的にするべきであるという動きが顕著になってきました。

実践派の先頭に立ったのは身体障害児の保護、教育に貢献してきたエドガー・アレンでした。彼は、1918年、オハイオ州エリリアロータリークラブに入会し、ロータリーは一丸となってこの事業にあたるべきであると主張して、1922年のロサンゼルス大会に身体障害児救済事業に関する決議案をトレード、クリーブランド各クラブとの共同提案として提出しました。

理事会はこれを受けて、この事業を奨励する決議22ー17を採択したのです。これに力を得た実践派の動きはますます活発になり、「ロータリー創立の理念を守るべき」というシェルドンを中心とする理念派との対立が深まり、ロータリーは分裂の危機に瀕します。

議論の中心は多額の金銭的支出を伴うクラブによる団体奉仕を、ロータリーの奉仕として認めるか否かでしたが、個人奉仕と団体奉仕、さらには金銭的奉仕の是非にまで話が広がったということです。

国際ロータリー理事会は、収拾がつかない状態になることを回避するために、両派の考え方を調和させるとともに、従来からあるいろいろな奉仕の考え方や行動を整理・調和させるための努力を繰り返します。

最終的には、1923年セントルイスの国際大会で、テネシー州ナッシュビルロータリークラブのウイルR.メニアJr.を中心とする委員会によって起草・提案された決議23ー34の採択によって、論争の終止符が打たれ、両派の対立は解消しました。

決議23-34

決議 23-34 は、国際ロータリー並びにロータリークラブの未来の指針として綱領に基づく諸活動に関するロータリーの方針を明確に表わすために提案されたものであり、ロータリーの綱領に基づくすべての活動の指針であると同時に、ロータリーの奉仕理念を表す唯一の文書でもあります。

その第１条では、ロータリーの奉仕理念が、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という標語に表される「科学的かつ道徳的な経営方針によって、自分の事業や同業者の事業の発展を図ると共に、業界全体のモラルを高めていこう」という職業奉仕の理念に支えられた「超我の奉仕」の哲学、すなわち、他人のことを思い遣り、他人のために尽くそうという国際社会を含む奉仕活動の根本原理であることが明確に定義されています。

第 2 条と第 3 条にはロータリークラブおよび国際ロータリーの役割がそれぞれ明文化されております。

第 4 条にはロータリーの奉仕の哲学は単なる理念の提唱ではなく、実践の哲学であり、奉仕活動を伴わねばならないというロータリー活動の重要なポイントが述べられています。

第 5 条には、クラブはその奉仕活動を自主的に選択する権利を有することと、その選択に対し国際ロータリーの取るべき立場が、また、第 6 条には奉仕活動選択の指針が具体的に記載されています。

さらに、この決議で忘れてならないことは、第 4 条でロータリアン個人にも、ロータリークラブにも、奉仕の理念に基づく実践が求められていることを述べたうえで、第 6 条 g 項に、ロータリーの奉仕活動の実践は個人奉仕が原則であって、クラブが行う奉仕活動は会員の訓練のための例示に過ぎないことが明記されていて、奉仕の実践は、個人奉仕か団体奉仕かという論争に終止符が打たれていることです。

このように、決議 23―34 はロータリー活動全般に関する根源的な指針となるものです。この決議は 1926 年のデンバー大会において、タイトルが「社会奉仕に関するロータリーの方針」と変更(26―6) され、以後の国際大会でも少しずつ修正(26―6、36―15、51―9、66―49)が加えられ、現在のロータリーの社会奉仕に対する方針となったのです。

職業奉仕関連の歴史概観　その４<四つのテストほか>

1927 ベルギーオステンド国際大会

「奉仕部門を四大奉仕、すなわち、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕に分けることが決定され、**当初、ロータリーの基本理念として一般奉仕概念と呼ばれていたものに、職業奉仕という呼び名が正式に与えられました。**」（前掲『ロータリーの心と実践』）

1932　ハーバート・テーラー　会社再建のため「四つのテスト」考案し実践する。
その後RI理事会は四つのテスト」を職業奉仕の構成要素として採用する。

1954　ハーバート・テーラー「四つのテスト」の版権をRIに寄贈する。

1987　職業奉仕に関する声明（Statement on Vocational Service）（抜粋）

職業奉仕は、ロータリークラブとクラブ会員双方の責務である。クラブの役割は、たびたび職業奉仕を実践してみせることによって、また、クラブ自身の行動に職業奉仕を生かすことによって、模範となる実例を示すことによって、さらに、クラブ会員が自己の職業上の手腕を発揮できるようなプロジェクトを開発することによって、目標を実践、奨励することである。クラブ会員の役割は、ロータリーの原理に沿って、自らと自分の職業を律し、併せてクラブが開発したプロジェクトに応えることである。

7

四大奉仕

ロータリーの四大奉仕、すなわち、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕の考え方は1927年ベルギーのオステンドで開かれた国際大会で決められたものです。

このときに、それまでロータリークラブの基本理念として一般奉仕概念と呼ばれていたものに職業奉仕（Vocational service encourages Rotarians to serve Others through their professions and to practice high ethical standards:職業奉仕は、ロータリアンがそれぞれの職業を通じて他の人々に奉仕し、高い道徳的水準を保つことを奨励します)という呼び名が正式に与えられたのです。

このvocationという語はbusiness、job、occupationやprofessionという語に比べて、神の授けられた仕事(天職)、社会生活における分業の担い手、職分、人に必要とされる職業というようなニュアンスが強い言葉です。このことを考え合わせていただければ、職業奉仕の理念がよりよく理解できると思います。

四つのテスト

ロータリーの哲学を端的に表現し、職業奉仕の理念の実行に役立つものとして、四つのテストがあります。このテストは、シカゴのロータリアンであり、後にロータリー創始50周年(1954ー55)に、国際ロータリー会長を務めたハーバートJ.テーラーが、1932年の世界大恐慌のときに考えたもので、商取引の公正さを測る尺度として、以後、多くのロータリアンに活用されてきました。

彼は、シカゴに本拠をおくジュエル・ティー(Jewel Tea)株式会社の代表役員でしたが、1932年にクラブ・アルミニウム (Club Aluminum)製品株式会社を破産の危機から救ってほしいと要請され、クラブ・アルミニウム社に移り、この会社を再生させる決心をしたのです。大不況の中で、低迷している会社を再生させるには、会社の中に、同業者にはない何かを育成しなければなりません。テーラーはその何かに社員の人格と信頼性と奉仕の心を選んだのです。そして、その育成の指針として会社の全従業員が使えるような倫理上の尺度として作られたのが四つのテストです。

テーラーの会社の4人の部長は、それぞれ宗教的立場が違いましたが、全員、このテストが、自分の信じる宗教に合致するだけでなく、会社や個人の生活にも模範となる価値観を与えてくれると述べたということです。

四つのテストは簡単な言葉ですが、クラブ・アルミニウム社の苦境期の決定を下す基盤となりました。会社の広告も、テストに照らし合わせて検討し、最上、極上などの表現を避け、製品の実際の姿を手短に述べるかたちに変わりました。ライバル会社への非難、悪口は、広告や販売推進パンフレットから姿を消しました。従業員は四つのテストを暗記するよう求められ、やがて、テストは、仕事のあらゆる面における指針となりました。

その結果、信頼と好意の雰囲気が、取引先や顧客や従業員の中に育まれ、会社の業績が次第に好転していきました。5年後の1937年までに40万ドルの負債は利子とともに完済され、その後の15年間で、会社は株主に対して100万ドル以上の配当を行い、その資産は200万ドル近くになりました。テストによって自分の生き方が変わった、と述べる手紙が数えきれないほどハーバート・テーラーのもとに寄せられたということです。

国際ロータリー理事会は、1945年1月に、四つのテストにロータリークラブの注意を喚起

すべきであると決定するとともに、2004年の規定審議会において四つのテストを明記した決議を行っております。四つのテストは職業奉仕の理念を端的に表すものとして、国際ロータリーにより多くの言語で出版されています。そして、ロータリー創立50 周年に当たる1955-56 年度RI 会長に就任したハーバート・テーラーは、その前年の1954年に、四つのテストの版権を、国際ロータリーに寄贈しています。

職業奉仕に関する声明

1987年国際ロータリーは40年ぶりに職業奉仕に関する特別委員会を招集しました。 その審議の結果が職業奉仕における新方針として採択され、職業宣言が採択されたのと同じ1989年に「職業奉仕に関する声明」として決議されました。

この職業奉仕に関する声明をよく読めば、それが従来から決議23-34の第6条g項に述べられているクラブの役割を、明確且つ具体的にしようとしたもので、あくまでも個人奉仕を主とする従来の「職業奉仕」の理念を基礎とするものであることが分かります。

ただ、「会員個人が行う職業奉仕に加えて、クラブも職業奉仕活動を行わねばならない」と規定したと解釈できないこともなく、個人奉仕か団体奉仕かという点について、若干の混乱を招いたことも事実です。

また、「この声明をきっかけとして、クラブの奉仕活動は活発になったが、奉仕の基本理念が忘れ去られ、クラブとして奉仕活動をする事がロータリアンの本来の目的であるかの様に考える人達が増えて来た。また、『一業種一人』という原則も有名無実となって、クラブの奉仕活動に参加できる能力・資力さえあれば、ロータリアンになれると言っても過言ではない位になったのではないか」という意見もあながち否定できません。

昨今の目を覆うばかりの企業の不祥事はロータリーの直接の責任ではありませんが、このような事態を解消する責任がロータリーにあることは否定できません。ロータリーの基本理念を常に念頭に置き、日常の職業活動や生活の中で、時にはその理念を思い起こして自己の行動に反映させ、真実のともし火となるのが真のロータリアンということになりましょう。

2016年規定審議会
「制定案16-10 奉仕の第二部門を改正する件」の採択

標準ロータリークラブ定款
第６条　五大奉仕部門

２．奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業および専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を実践していくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うこと、そして自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれる。

8

2016 年の規定審議会で、職業奉仕部門においては、「クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれる」という決議が採択された結果、職業奉仕部門の対象とする分野が、大きくなりました。すなわち職業奉仕部門は、奉仕の理念を研究する「内なる人づくり」と対外的な奉仕活動の「外なる人づくり」という２つの要素に区分して考える必要が出てまいりました。

この決議の採択によって、職業奉仕は、ロータリーの根幹なのかという議論が交わされることが多くなりました。審議会決定の内容をそのまま読むと、職業奉仕は、根幹ではなく奉仕活動の一つにすぎないという解釈も、有り得ることと考えられます。

しかしながら、審議会決定の中には「例外規定」も多く設けられ、クラブ運営、活動は、個々のクラブの柔軟性・自主性による裁量に委ねられます。したがって、個々のクラブにおいて、職業奉仕を初め各部門に関して、より魅力的なクラブ作りが求められます。

それには、職業奉仕部門に関する基本的な考え方を、各クラブが検討し、より魅力あるクラブになる将来像を描く必要があると考えます。

【引用文献】

今回の卓話モデルの解説文は、その多くを次の三つの文献から引用しております。

１　『職業奉仕の心』
（2008 年 9 月 1 日　国際ロータリ-2660 地区　2008-2009 年度　職業奉仕委委員会）

２　『ロータリーの心と実践』
（2015 年 3 月　国際ロータリー第 2660 地区 研修委員会）
（https://www.ri2660.gr.jp/khwpress/?page_id=1352）

３　『ロータリーの職業奉仕入門（Q&A）2018 年 5 月 8 日改訂版』
（http://www.ri2660.gr.jp/2018-19/wp-content/uploads/2018/06/ロータリーの職業奉仕入門（Q&A）【改訂版】.pdf#search=%27 職業奉仕+2660 地区%27